魔法少女リリカルなのはStrikers ～鋼の竜騎士と魔導師たちの戦い～

がるがる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ　～鋼の竜騎士と魔導師たちの戦い～

【Ｎコード】

Ｎ７１４７Ｘ

【作者名】

がるがる

【あらすじ】

八神はやて二等空佐によって新たに設立された部隊

古代遺物管理部　機動六課

その初出動に突如現れたロストギア「レリック」を狙うアンノウン

アンノウン対策として聖王教会騎士団より機動六課に派遣された１

人の騎士「竜騎士（ドラグーン）」

これは騎士と、騎士と出会い共に戦った魔導師たちの物語

プロローグ　「終わり」（前書き）

どうもはじめまして！！

トランスフォーマー大好きな新米作者がるがるです！！

本作品はリリカルなのはにハマったがるがるが勢いで書いた初投稿作品です！！

ではプロローグ「終わり」

どうぞお楽しみくださたい！！

プロローグ　「終わり」

これは全てを守るために戦い、全てを破壊した者と、正義と平和、そして大事な人を守るために、その者と共に戦った魔導師たちの物語である。

――――――――――――――――――――――――

無限に広がる漆黒の空間……。

生命体が暮らし、繁栄することは許されない空間……。

宇宙空間。

恒星とその周囲に生まれる惑星同士の様々なバランスが奇跡的に揃わなければ、まともな知的生命体も生まれない世界。

その世界で少し特殊に生まれたその種族は精神的にも、物質的にも非常に強固にできた存在である。だが、悲しいことにどんな知的生命体も戦争を行うようで、それは彼らも例外ではなかった。

――――――――――――――――――――――――

ある惑星の衛星軌道上。
そこに宇宙空間でも活動可能な金属のボディを持つ生命体（以降、金属生命体）と、真空下では生きることも不可能な有機生命体を乗せた戦艦が何十隻も展開していた。

だが、艦隊は攻撃を行うわけでもなく、ただ宇宙の一点、激しい戦いの光へ艦首を向けているだけであった……。

――――――――――――――――――――――――

艦隊が揃いも揃って艦首を向けていた空間。

そこから少し離れた場所には戦艦が二隻攻撃体制で待機をしていた。

かつて、正義と悪に分裂し戦い、宇宙を巻き込んだ戦争を行い、敵対し、今や手を取り合っている2つの金属生命体の軍の指導者を乗せた戦艦は、宇宙において目の前とも言える距離で繰り広げられている戦闘に入り込む余地も無く、眺めていることしか出来ていなかった。

――――――――――――――――――――――――

宇宙を照らす戦いの光が激しく輝く空間には、2体の金属生命体が戦っていた。

1体は銀と蒼い装甲に、背中から金属製の銀の翼を羽ばたかせて、両手に2本の剣と背中のジョイントに銃をセットしており、青く輝く一対の目を持つ者。

もう片方は黒い装甲に朱いラインが幾重にも走るボディに、両端に深紅の刃があり、ボディと同じように黒い金属に朱いラインが走る槍を持ち、深紅の血の色の目を青い者に向けている。

2体がぶつかるたびに爆発が起こり、次の瞬間にはまた別の場所で爆発が起こる。

それを何度も繰り返す。だが、突然黒い者が離れた場所で戦いを見守っていた二隻の戦艦に向けて左手を向けると、左手を中心に三角形の平らな朱い光が発生し、そこから朱色の弾丸が発射された。

青い者はそれを見た瞬間弾丸に向けて加速。更に身体を変形させ一瞬にして戦闘機になるとさらに加速。ギリギリで弾丸の進行方向に回り込み自ら戦艦の盾となる。その身に弾丸が当たり爆発する。

黒い者はそれを見てほくそ笑んだが、次の瞬間、爆発の中から飛び出してきた戦闘機がお返しとばかりに撃ってきたビームに対応仕切れず、それを次々と喰らう。

だが、戦闘機はそのまま黒い者に向けて加速。横回転をしながら今度は竜に変形。そのままの勢いで黒い者の左腕に噛みつき、肩ごと食いちぎった。

黒い者が振り返ると同時に竜は再び変形。青い者の姿に戻る。
だが、さっきの弾丸のダメージなのか、青と銀に輝く装甲は至るところに亀裂が走り、右の翼は根元が折れており、正常に動きそうにない。

実は青い者は３つあるうちの２つの動力炉を肩翼に１つずつ備えており、片方の翼が破壊されればその分出力も、攻撃の威力も低下し、戦闘も厳しくなる。

だが、黒い者は攻撃に必要な出力を左肩に装備されていた動力炉に６０％は頼っていて、その動力炉は先ほど食いちぎったので、結果

は青い者が少し有利であり、黒い者は青い者を仕留めるつもりでいたが、状況を利用され却ってピンチに陥れられたのだった。

だが、黒い者はそんなことは関係ないとでも言う風に右手で持っていた槍を凪ぎ払うかのように振るう。すると黒い者の周囲にさっきと同じ三角形の光がいくつも発生し、そこから朱い砲撃を連射してきた。

青い者はそれを避けようとするが先ほどのダメージの影響で、うまく避けれずに何発も被弾する。それによって左足が吹き飛び、右の翼にも砲撃が当たり動力炉が爆発する。

もはや青い者は誰が見てもボロボロでこの戦いに勝てないのは明白であった。

黒い者は青い者に止めをさそうと槍を向ける。すると槍の朱いラインが禍々しく光り、槍の先端に朱い光の球が生まれる。
それは瞬く間に巨大化し、戦艦一隻は飲み込むサイズにまでかくなる。
青い者は回避しようと動くが、次の瞬間に朱いリングが発生し回避しようとしていた青い者の身体を空間ごと固定した。

普段ならこんな拘束などすぐに破壊するのだが、身体がボロボロになり、パワーも低下している今では簡単に破壊できずにいた。

そうこうしているうちに黒い者はチャージを終え、無慈悲にも拘束を抜け出そうともがいていた青い者に向けて、朱い砲撃が放たれた……。

砲撃が撃たれた場所には青い者がかろうじて存在していた。

だが、右足の膝の付け根から下は吹き飛び、左腕も二の腕の部分からひしゃげ手も破壊されていた。
顔をとっさに覆ったフェイスマスクにもダメージがあり、右の側面部がちぎれ露出した顔にまで傷ができていた。

何よりも酷いのが砲撃をもろに受けた胸で、大きく抉れ青く光輝くコアが見えていた。

だが、青い者はそんな怪我を負いながらもまだ戦う様子であり、離れた場所で悠々とたたずむ黒い者を睨み付ける。
黒い者は槍を青い者に向けて構える。すると黒い者の身体のコアが朱く輝きはじめ黒い者の身体を膨大なエネルギーとなって覆いはじめる。油断も容赦もせずに、今の自分に出せる全力の攻撃。それを青い者に向けて、叩き込むつもりである。

対する青い者も右手で持っていた剣を構える。コアが青く光輝き、強大なエネルギーとなってその身を覆う。

対峙する青と朱の光。
その２つはどんどんと輝きが強くなり、それと比例して狂暴なエネルギーの嵐が周りに放出される。

その光景はなにも知らない者が見れば美しい輝きに見えるが、これの意味を知る者たちからすれば、恐ろしい光景であった。

そして、青い光と朱い光は同時に距離をとり……

次の瞬間

ぶつかり合った。

青い光と朱い光がぶつかり合った瞬間、惑星一つを悠々と飲み込むサイズの光が発生した。

それは青い者も

黒い者も

二隻の戦艦も飲み込み

更に周囲にある様々な物質を吸い込み

一際激しく輝き

そして

世界は

崩壊した……。

プロローグ　「終わり」（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました！！

勉強不足ゆえに、駄文かもしれませんでしたか、これからもよろしくお願いいたします！！

プロフィール（前書き）

主人公とデバイスの紹介です。
なお、この作品では「竜騎士」は「ドラグーン」と読んでください。

１０／２０
本文修正
１０／２１
本文修正
１０／２３
本文修正

プロフィール

主人公

名前
ファング＝ブレイグル

年齢
２３～２７歳（外見年齢）
本当の年齢は不明

身長
１７８ｃｍ前後

体重
７０ｋｇ前後

外見
銀髪。髪型はザンバラ
青い瞳をしている。

一人称
「俺」
ハイテンションのとき
「俺様」

魔導師ランク
空戦Ｓ＋

使用術式
古代ベルカ式

魔力光
青

聖王教会騎士団に所属しており、普段は教会内で新米騎士や、見習い騎士の練習相手をしている。騎士団の人間には慕われている。

カリムとヴェロッサが幼いころから、二人の面倒を見ており、カリムには「お兄様」、ヴェロッサには「ファング兄さん」と呼ばれている。
シャッハとはよく模擬戦をしている。

はやてとはカリム繋がりで六課設立前から知り合っていた。

シグナムがファングのことをはやてとシャッハに教えてもらってから、模擬戦を申し込もうと意気込んでいるが、いざ申し込もうというときに限り任務か、依頼で教会を留守にしており、まだ戦ったことがない。

魔力量は少ないが、身体能力がある理由により常人ばなれしているため、セットアップしなくてもＡＡランク魔導師２０人ぐらいは圧倒できる。
セットアップ時の騎士甲冑や、デバイスアーマーのデザインに、戦闘スタイルなどから　「竜騎士（ドラグーン）」と呼ばれている。

パートナーデバイス
ペンドラゴン

アームドデバイスでＡＩ搭載型。男性人格。

待機モードは牙の中央に青い宝石が埋め込まれたネックレス。

１人称は「私」。

ファングによって作り上げられた従来のデバイスとは異なる　「デバイスアーマー」　と呼ばれている唯一無二のデバイス。

穏やかで優しい性格をしているが、天然なところがある。
キレると一気に口が悪くなり相手に罵詈雑言を浴びせはじめる。
例…「出来損ないのクズめっ！！」
「貴様にはゴミ捨て場がよく似合う！！」
「引きずり下ろして八つ裂きにしてくれるわ！！」

１ｓｔフォーム
上半身に黒いシャツ、青いジーンズを履き、身体全体を覆う青いコートに銀色のラインが走り、背中に翼を折り畳んだ竜の絵が描かれているデザインのジャケット。（キングダムハーツのＸ？機関の黒コートの色違い。）
両手を銀のガントレットが覆い、腰の後ろに剣（アームドデバイス）が２本鞘に納刀した状態でセットされている。背中のジョイントには銃（アームドデバイス、カートリッジつき）をつけている。
首もとのパーツにペンドラゴンが宝石形態で埋め込まれている。

２ｎｄフォーム
身体全体にデバイスそのものが変化した青と銀の装甲が装着されるフォーム。竜の顔を象ったデザインのフェイスパーツが特徴的な姿。剣と銃は同じところに装着している。
ペンドラゴンは胸元に埋め込まれている。
このフォームになると、ペンドラゴンに搭載されているＡＬＣドライブが使用可能になり、大量の魔力生産による大規模攻撃が可能になる。

ＡＬＣドライブとはファングが開発した言うなれば人工リンカーコアである。
ＡＬＣドライブとリンカーコアをリンクさせることによって、
ＡＬＣドライブ＋リンカーコア＝魔力ではなく
ＡＬＣドライブ×リンカーコア＝魔力になるしくみである。
ＡＬＣドライブの生産魔力量はかなり高くすることができる。

プロフィール（後書き）

以上、プロフィールでした。

ファング「次回も読んでもらえると有難い。」

よろしくお願いします。

第1話　「いつもの朝」

まるで、靄に包まれたかのような曖昧な感覚から目が覚める。
まとわりつく眠気を青年は身体を伸ばして発散させ、まだ寒さの残る室温に思わず「さむっ」と呟く。
ベッドの誘惑を振り払い、身体を起こし、カーテンを開ける。
その瞬間、部屋に地平線からまだ少ししか出ていない太陽の輝きが部屋を照らす。
≪おはよう、いい朝だな≫
突如、部屋に青年以外の声が響く。だが、彼はそれに動揺するわけでもなく、「おはよーさん」と投げやりに返した。
≪む、ダメだぞファング。挨拶をされたら、しっかりと返さなければいけないぞ。≫
青年……ファング＝ブレイグルは一つ溜息を吐くと、声の発生源である机の上に置かれた青い宝石が埋め込まれた牙の形をしたネックレスへと目を向ける。
「じゃあドラン。今は何時だ？」
≪朝の４時５０分≫
ドランと呼ばれたネックレス、アームドデバイス「ペンドラゴン」

が迷いなく即答すると、ファングはまた溜息を吐き、着ていた寝間着を脱いで、クローゼットまで歩き中から普段きている白いシャツに黒いジーンズ、左胸に竜の絵が小さく刺繍されているジャケットを取り出して着ていきながら長年ともに戦ってきた相棒に「そんな時間にまともに返答するほどテンション高くねぇよ。」と返した。

「第一、昔の夢を見たのに元気に挨拶できるはずねぇだろ。」

≪……そうか≫

ペンドラゴンはそれだけ言うとそれっきり黙ってしまい、ファングは少し言ったことを後悔して小さく「……スマン。」と呟き、着替えを終え、ペンドラゴンを持って部屋を出た。

ファングが部屋の扉をくぐると長い廊下にでた。

ファングの部屋も廊下も聖王教会とよばれる組織が本拠地とする大聖堂の中に含まれており、彼自身も聖王教会の戦力である騎士団に所属している。

聖王教会はかつて存在したベルカという世界を治めていた　「聖王」を崇拝しており、あらゆる次元世界に影響力を持っており、時空管理局のスポンサーもしている。

別にファングは聖王を崇拝などしていないが。
普段騎士団がトレーニングをしている中庭の一角に着くと、誰か先客がいるわけでもなく、蕾を開きはじめた花たちが風に揺られているぐらいであった。
ファングはいつもの場所に着くと、立ち止まり周囲に誰もいないことを確認する。

「ペンドラゴン。１ｓｔフォーム。セットアップ。」

≪Ｙｅｓ，ｍｙ ｍａｓｔｅｒ． Ｆｉｒｓｔ ｆｏｒｍ ｓｔａｎｄ ｂｙ ｒｅａｄｙ，ｓｅｔ ｕｐ．≫

ファングの身体を光が覆い、すぐに弾ける。ファングがさっきまで着ていた服は消え、代わりに黒いシャツに青いジーンズを履いている。
その上から身体全体を覆う青いコートを着用した。
両腕の肘から先は、銀に輝くガントレットに覆われる。
背中のジョイントにライフル型のアームドデバイスがセットされる。
更に２本の剣が鞘に納刀した状態で現れ、×になる形で腰の後ろに装着される。
コートの背中に光と共に翼を折り畳んだ竜の絵が現れ銀のラインが身体中に走る。首もとに宝石状態のペンドラゴンが埋め込まれ、セットアップが完了した。
ペンドラゴン。１ｓｔフォーム。

まるで衣服のような格好だが、周囲に魔法障壁を何重にも展開している騎士甲冑である。

腰の鞘から剣を2本とも抜くと、身体を上から見て斜めにし、左の剣の剣先を正面に向け、右の剣の剣先を斜め後方に向ける。

そのまま、一分程動かずに意識を落ち着かせ、集中力を高めていく。

目を少し開け、前方を睨むように見据え、次の瞬間地面を蹴る。

一瞬にして１０ｍほどの距離を走り抜け、右上から左下へ左の剣を斬り下ろす。

風を切る音が聞こえる瞬間には、既に次の攻撃に入っており、右の剣を下から上へ斬り上げる。

すぐに右の剣を返し、右に斬り下ろしながら後ろへ小さく跳ぶ。

着地して前に踏み込みながら両方の剣で突きを放ち、斬り払いをする。

他にも様々な剣技を行う。ただ純粋な己の技術を使い、時にわざと剣の遠心力に振り回されることによって移動をし、時に力任せに振るう。

ただ、一心不乱に剣を振るう。

始めてから5分がたち、１０分がたち、３０分がたち、１時間がたった。

稽古もクライマックスに入り一層激しさを増す。もはや剣は見えず

腕も霞んでしまっている。
剣が風を切る音が重なりまるで一つの音のように中庭に鳴り響く。
最後に剣を2本とも頭上に振り上げ、一気に斬り下ろす。
風を切る音が高く響き、巻き込まれた空気が吹き抜けあたり一面の草花を揺らす。
息を一つ吐き、剣を二本とも鞘に納める。
「ファングさぁーん！！」
そこへ元気な声が響き、一人の少女がファングのもとへ走り寄ってくる。
ファングが振り向くと同時に笑顔で手に持ったタオルと飲み物を差出してきた。
「おはようございます！はい、どうぞ。」
「サンキュ。もうそんな時間か。」
「ええ。ファングさん今日も気合入ってましたね。どれぐらいしていたんですか？」
「ドラン、今何時？」
≪6時03分だ。≫
「んじゃ一時間だな。」

「そんなにですか！！？　疲れたりは…。」

「大丈夫だよ。任務のときはこれ以上していることがあっから。ノープログレム。いつも通り稽古始めるぞ。」

「ですけど……。」

「心配性だなぁ。シャランは。そんなこと言ってると稽古の時間が終わるぞ？」

「う……そ、それは嫌です……。」

シャランと呼ばれたブロンドの髪を肩まで伸ばした少女、シャラン＝フェアリィはファングから言われたその言葉に思わず本音を言ってしまう。

ファングはそれを聞くと　「正直者で結構」　と言いシャランの頭を優しく撫でた。

ちなみに頭を撫でられたシャランは　「うぅ……／／／」と唸り、俯いていた。

～シャランｓｉｄｅ～

うぅ……また頭撫でられた……。

嫌じゃないんだけど、むしろ気持ちいいし昔から好きだけど、いつも子供扱いされてるみたいで複雑だなぁ……。
私だってもう17だしスタイルにも自信はあるのになぁ……。
む、胸も結構自信はあるし。
やっぱり昔から私のこと見ていてくれたからなのかなぁ…。
この人を振り向かせるには、どうすればいいんだろうなぁ……。
「シャラン？」
「あ……はい。」
「どうした？なんか難しそうな顔して。」
「いえ……少し考え事を……。」
「なに！！？　お前が考え事を！？　こりゃ明日は雪でも降るか……？」
「ちょっと！？？　どう言うことですかそれ！？」
「だって昔から単純思考のお前が考え事なんて……。」
「私だって悩みぐらいありますよ！！」
「悩み！！！！！？？」

「あ……って何でもっと驚くんですか！？」

い、いつも意地悪されるけど……。

だけど……

私は……。

～シャランｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～ファングｓｉｄｅ～

「オーディン、セットアップ！！！」

≪Ｙｅｓ，ｓｉｒ．　ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ，　ｓｅｔ　ｕｐ．≫

中庭から普段シャランと稽古をする教会内にある訓練所に到着し、シャランが首につけていた羽のネックレスを外し、叫ぶ。

それに戦女神の名を冠されたアームドデバイス「オーディン」が応え、シャランの身体が光に包まれる。

光が弾け、その場所には純白のインナーの上に漆黒のジャケット、白のカーゴパンツに金属製のブーツを履いたシャランがいた。

更に羽が光に包まれ、全長１ｍほどの大剣へと姿を替える。

大剣は白い刀身に金の装飾が施され、まるで芸術品のように神々しく輝いていた。

……作った俺が言うのもあれだが、いつ見ても綺麗な剣だな。

「ハァァァァァァァ！！！！」

と思ったら、シャランがオーディンに銀色の魔力光を纏わせて大きく振りかぶりながら突撃してきた。

俺はそれを大きく飛ぶことによって避けた。

シャランはそのまま俺がさっきまでいたところにオーディンを叩き付ける。

すると、オーディンを叩き付けた所を中心に地面が凍る。

シャランの魔力変換資質である凍結を使った攻撃魔法だ。

大剣は振りかぶっているときは懐が無防備になってしまうが、そこを魔法障壁でガードすればそこの問題はクリアされる。

ならば敵は自然と攻撃の反動で硬直したシャランを狙うために、最小限の動きで回避をして反撃をする。

だがこの技はそんな敵を対象にした技で、大剣での攻撃はフェイクだ。狙いは攻撃しようとしてくる相手を氷づけにすることだ。

ちなみに範囲が広いから、攻撃を免れた敵に接近される頃には態勢を立て直している。

俺はそのまま、接近せずにオーディンを俺に向けてくるシャランを

見据える。
シャランもその銀色の瞳でこちらを見据えてくる。
シャランはオーディンを左腕の脇下に持ってくると一気に斬り上げる。
すると、銀の斬撃が地を滑るように俺に向かってくる。
それを横に避けるとさっきまでいた場所から氷の柱が空に向かって伸びた。
だが、シャランはすでに次の攻撃に入っている。
左手を俺に向けて、魔法を放つ。
「アイススナイプ！！　ファイヤ！！」
≪Ｉｃｅ　ｓｎｉｐｅ≫
シャランが叫ぶと同時にいくつもの銀色の魔力弾が俺に向けて突撃してきた。
それをジャンプして避ける。
何発かが地面に当たり凍らせるが、残りは全て避けた俺へと軌道を変える。
俺は宙に浮いたままそれを両の剣で切り裂いていく。
地面に着地すると同時にシャランから距離をとる。着地した場所から再び氷の柱が伸びる

俺はシャランに向けて、場違いな笑顔を向ける。シャランは少し驚くとすぐに笑い返してくる。

「楽しいな」

「楽しいですね。」

そして、同時に踏み込んだ。

第1話　「いつもの朝」（後書き）

読んでいただきありがとうございました！！

ファング「ここからシャランのプロフィールだ。」

名前
シャラン＝フェアリィ

身長
１６８ｃｍ前後

体重
乙女の秘密☆

外見
ブロンドの髪を肩まで伸ばしている。
銀色の瞳。

魔力光
銀色

魔力変換資質
凍結

魔導師ランク
ＡＡ＋

パートナーデバイス
オーディン

聖王教会の修道騎士。ファングとは父親が騎士団に所属していたときに知り合った。
子供のとき、父親が大怪我をし、自身の無力を痛感しファングに戦い方を教えてもらいはじめた。

次回も宜しくお願いします！！

第2話　「朝2……お偉いさん登場」（前書き）

すいません更新遅れました！！

ファング
「本当にすまない。」

ペンドラゴン
≪こんなダメ作者が書いた駄作だが、読んでくれればありがたい。≫

では

ファング
「第2話」

ペンドラゴン
「お偉いさん登場」

バンブルビー
「どうぞお楽しみくださ～い！！」

がるがる・ファング・ペンドラゴン
「「≪なんでいる！！？≫」」

第２話　「朝２……お偉いさん登場」

～ファングｓｉｄｅ～

稽古も終わり俺たちは食堂へと移動していた。

「うぅ………まだ顔が痛いです……。」

シャランは顔を抑えていた。

あん？　なんで顔を抑えてるかって？

稽古で剣を思いっきり振り上げながら接近してきたときに足払いをして、凍った地面に顔面から突っ込んだからだ。

「ファングさん！！　顔に傷がついてお嫁に行けなくなったらどうしてくれるんですか！！！」

「そうならないように気を付けているし、もしそうなったら俺が嫁に貰ってやるよ。」

「ふぇ！？？　あ、あのそのそういうわけで言ったわけじゃなくて、でもファングさんがもらってくれるのも悪くはないと思いますしいやむしろうれしいというかそれがいいというかああああああああああああああああああああａａａａａａａａａａａａａａａａａａ」

「お、おい落ち着け！！！？？　なんか頭からものすごい量の煙が出てんだけど！！？」

落ち着かせるのに３０分ほどかかったことを追記しておく……。

食堂。

シャランを何とか落ち着かせ、俺たちは朝食を食べるためにここにやってきた。

受け取り口から今日のメニューを受けとり席に着く。

シャランも俺の席の隣につき、両肘をテーブルに乗せて手を組む。

「「聖王陛下、今日の糧に感謝します。」」

顔を伏せて聖王に祈りと感謝をささげる。

たっぷり十秒祈りをささげ朝食に手を付ける。形式的なものとはいえ朝昼晩これは相変わらず面倒くさいな。

今日のメニューはパンにシチューと目玉焼きだ。

聖王教会では肉はさっぱりでないという訳ではないが、あんまりでてこない。

理由は……なんだったかな。忘れたな……。

「おはようございます。お兄様。」
そこで声をかけられた。
この声は……。
振り向くとやはりあいつがいた。
金髪をストレートにした俺のお妹分。
「おはようさん。カリム。」
カリム＝グラシア。
俺と同じく聖王教会騎士団所属の騎士だ。
≪おはよう。騎士カリム。≫
「えぇ、ドランおはよう。シャランもオーディンもおはよう。」
「≪おはようございます。騎士カリム≫」
シャランたちも立ち上がり挨拶を返す。
カリムも今から朝食のようで、手にトレイを持っていた。
「となり、よろしいですか？」
「ん、かまわんぞ。」
そんな返答をし、カリムが隣に座る。

…ちなみに今の俺はシャランとカリムに挟まれる位置だ。

「お兄様、この後の予定は？」

「今からちょい本局に行って三提督と話をしてくる。午後は騎士団に稽古をつけようかと思っているが、なんで？」

「えぇ、ロッサが休みを取ってお昼にこちらに来るのでお茶会をしようかと。それでお兄様もご一緒にどうかと。」

ロッサというのはヴェロッサ＝アコースというカリムの義弟で俺の弟分だ。管理局の特別査察部に所属している査察官だ。だが……

「あいつ仕事さぼったり遅刻しているのに休暇取って大丈夫なのか？」

「上司からの話では仕事態度はあれですけど、仕事自体は優秀なので何も文句は言えないだとか…」

ロッサは仕事さぼりの常習犯なのだ。だが仕事はちゃんとしているから質が悪い。上司も強く言えないらしい。

「まぁ、別に騎士団の稽古は俺が気まぐれでやっていることだから行こうと思えば行けるが……アイツ、シャッハに叱られるんじゃね？」

「何でもシャッハが食べたいといっていたケーキを持ってくるそうですよ？」

「なるほど。ケーキでシャッハの機嫌を取るという事か。」

シャッハとは修道騎士シスター・シャッハ＝ヌエラのことである。幼い頃からカリムとロッサの護衛を務め、ロッサに対しては教育係も務めていた。やる気に欠くロッサを昔から叱り続けており、それは今も変わらない。そのためかロッサはシャッハに頭が上がらない。ちなみにシャッハとはよく摸擬戦をしている。一回も負けていないが。

「わかった。んじゃ久しぶりにみんなでお茶するか。」

「はい。」

「んじゃ、シャラン、お前も予定を開けとけよ。」

「え、あ、はい……ってわたしもですか！！？」

今まで空気だったシャランにも話を振る。うん、いい感じにテンパっているな。

「憧れのシャッハとお茶できるんだぞ？お前にとってこれほどいいことはねぇだろ。」

そう、シャランはシャッハを尊敬しているのだ。

「で、ですけど私は……」

「実はシャッハもロッサもあなたに会いたがっているんですよ。お兄様が稽古をしている女の子に会ってみたいと。」

「え、えぇ！！！？」

おーおー慌ててるけど嬉しいのか若干顔が笑ってるよ。まぁ憧れの人に会いたいって言われればそりゃ嬉しいよな。

「では今日の3時ごろにいつもの場所で。」

「あいよ。」

「は、はい分かりました！！」

そのあとは雑談をしながら残っていた朝食を食べ、解散となった。カリムは自分の執務室へ、シャランはシスターとしての仕事をしに、俺は管理局本局へ行くために地上本部へと愛車を走らせた。

時空管理局地上本部。

本局へと行くためにはここにある転送ポートを使用していかなければならない。

……めんどくせぇな。俺はその気になればここを使わなくても行くことはできるんだけどな……。

……やめよう。あのタイプのあれはエネルギー消費がばかにならないくらいに高い。
次元跳躍なんて一回でもしたらエネルギーがすっからかんになっちまう。
なんてことを考えながら転送ポートに向かう。
「あら、ファングじゃない。」
はぁ～～やっぱり我慢するしかねぇかな……。
「……ちょっとファング？」
だけどなぁ～～地上本部まで来るのもめんどくさいしなぁ……。
「……ファング！！」
ん？
「はぁ……やっと反応した。」
振り向くとピンク色の髪の女がいた。
「なんだドゥーエか。」
「なんだとは何よなんだとは。美人に話しかけられておいてそれはないんじゃないの？」
「自分で自分のことを美人って言うなよ……」

「それなりに自信はあるもの。」

目の前で自分は美人だと言った女性はドゥーエ。

地上の英雄として名高いレジアス・ゲイズ中将の秘書で、俺のちょっとした知り合いだ。

「今日はどうしたの？」

「本局まで行くために来た。」

「また三提督？なんで聖王教会の騎士がかの三提督と対談なんて出来るの？」

「秘密だ。」

「そう……ちっ。」

おい、なんだ今の舌打ちは。

「そうだ。対談ってお昼には終わる？」

「さぁ……内容によるからな……。１２時ぐらいには終わるかな。」

「だったらお昼一緒に食べましょう？」

「いいが……どした？」

「あなたと一緒に食べたいのよ。」

物好きなやつだな……。

「分かった。対談が終わったらメールする。」

「えぇ、それじゃ私はこっちだから。」

「あぁ。またあとで。」

曲がり角について俺とドゥーエは別れた。

時空管理局本局

次元世界を管理する時空管理局の総本山。

次元空間の海に浮かぶその施設に俺はいた。

俺の目の前には1つの扉がある。

大きく深呼吸をして気持ちを落ち着かせる。

扉をノックすると中から「どうぞ。」と言う声が聞こえ、扉を開け

中に入る。
部屋の中には老人二人に老婆一人がいた。
「久し振りですな。ファング殿。」
「そうか？　半年前に会ったじゃねぇか。」
「半年ぶりは我々からすれば十分久し振りですよ。」
「そうかい。」
レオーネ＝フィルス法務顧問相談役。
ラルゴ＝キール武装隊栄誉元帥。
ミゼット＝クローベル本局統幕議長。
管理局の黎明期を支えた功労者たちだ。
今は名誉職に就いているが、管理局の運営には口出しなどはしていない。
「さて、ファング殿。今日呼ばれた理由は分かるか？」
「なんとなく。」
俺が答えるとラルゴが空間モニターを展開して操作をする。
「四日前にある管理世界の町がアンノウンの襲撃を受けて壊滅したそうよ。」

「あぁ…知ってる。生存者はゼロなんだってな。」
たしかそこに駐屯していた部隊も全滅だっけか。
「実は現場に駐屯していた管理局の部隊が通信が遮断されるまでに映像データを複数送っていたの。」
「へぇ……。　で、それと俺が呼ばれた理由の関係性は？」
「これじゃよ。」
そう言ってラルゴが空間モニターに映像を俺に見せてきた。
そこには金属のボディを持ったロボット達が局員と民間人にビームを乱射している光景が映っていた。
ビームにあたった人間は一瞬で焼かれ、灰と骨のみになっていった。
「この映像が送られてきてから二分後、現場と連絡が取れなくなったわ。」
「……そうか。」
「本局はすぐに部隊を派遣したけれども、到着した頃にはすでに壊滅していたそうよ。」
「……で、アンノウンは？」
「見当たらなかったそうよ。」
「ファング殿、今まであやつらはこのような攻撃行動はして来なか

った。なのになぜ、攻撃してきたのだ？」

「攻撃してきた理由は知らないが……実はここ四年の間にあいつらは様々な次元世界に何回も現れている。」

「なに？」

「あいつらは何かを探し回っているようだ。」

「な、なんでそれをいわなかったの！！？」

「なんで？俺たちの持っている情報全てをお前たちにいう必要はない。そういう決まりだろうが。」

ぶっちゃけ知らない奴が死のうが、俺はどうでもいいしな。

「まぁまぁミゼットもラルゴも落ち着け。とりあえず本題に入ろう。これからの対策を決めなければいけないのでファング殿をここに呼んだのじゃろうが。」

あぁ、だから呼んだのか。文句言うために呼んだのかと少し思ってしまった。

この後、三提督と対策を建てようと会議をしたがでできた案は全部現実的ではないものだったので結局何も決まらなかった。

地上本部食堂。

ドゥーエと待ち合わせした俺は一緒に少し早めの昼食を食べている。

「あ、それ美味しそうね。ちょうだい。」

「どうぞお好きに。」

「いただきま～す。はむっ。」

「美味いか？」

「美味しいわね。」

そうか……。

「はい、あ～ん。」

は？なんかミートボールにフォーク刺した状態で差し出してきた。

「お返しよ。」

「いや、それだと間接キスになるんだが。」

「別に私はいいわよ。難なら口移ししてあげましょうか？」

こいつは……。

「わーったよ。はぁ……あむっ。」

「どう？美味しい？」

「あぁ……うめぇよ。」

「ちょっと、何よ今の間。」

「一瞬ミートボールってどんな味か忘れてた。」

「そ、そう……。」

真面目に忘れたからな……。

なんてことを思いながら、飯を食っていく。

「「ご馳走さま。」」

飯も食べ終わり、俺とドゥーエは一緒に食堂を出た。

なんでもロビーまで見送ってくれるらしい。

「今度はいつ来れる？」

「予定はしばらくないな。」

「そう……。」
落ち込んでるよ。
……しゃーない。
「あー予定は無いけど、呼ばれればいつでも来るよ。」
「！！ホント！？」
暗かった表情から一転して、期待に満ちた目で見てきた。
「あぁ……。」
「……ふふ。分かったわ。」
そう言ってドゥーエは微笑んだ。
そうこうしているうちにロビーに着いた。
「じゃあまた今度な。」
「えぇ、じゃあね。」
俺はそのまま出入口に向けて歩き出しだ。
「ファング！！」
「？なんだ？」

ドゥーエに呼ばれ、俺は振り返った。すると、ドゥーエの顔がすぐそばにあり、頬に温かいなにかが当たる感触がした。

「……へ？」

「ふふ……またねファング。」

その時のドゥーエの顔は少し頬を赤く染め、笑みを浮かべていた。

第3話「昼……食い過ぎに注意」

太陽がてっぺんから少し傾いた午後2時。

聖王教会の中庭にはまだ十代前半の少年少女たちが集まって、トレーニングをしていた。

この子供たちは皆聖王教会騎士団の見習い騎士。騎士のたまごだ。

「いいか！！騎士は日々精進あるのみだ！！どんな時でも聖王教会騎士としての誇りを忘れるな！！！」

【はい！！！】

そんなたまごたちに戦いの方法と騎士としての心得を教えているのは教会騎士団所属の騎士グラン＝アルブレヒト。齢６５歳になる騎士団の長老だ。

本人は年の影響など関係なく恐ろしく元気で、普段は見習い騎士たちにこうやって教会騎士としての心得を叩き込んでいる元気な爺さんだ。

そこへ、本局から帰ってきたファングがやってきた。

「お～相変わらず元気だな～おい」

「ファングか……どこか行っていたのか？」

「本局に行ってた。二時間も運転は疲れるわ」

「ふむ……どうだ？今から摸擬戦なりこやつらのトレーニングに付き合わんか？」

「わりぃ。いまからカリムたちとお茶会だわ」

「そうか……いや、気にするな。そっちの予定を考えずに言ってしまったからな」

「こんど時間が空いたら手伝うからさ」

「あぁ。騎士カリムたちによろしくな」

「あいよ」

そう返事をしてファングはカリムの執務室へ向かうために足を進めた。

「はむ……これ美味いな」

「そうかい？　買ってきたかいがあったよ」

カリムの執務室には五人の男女が一つのテーブルに円形に座ってケーキを食べていた。

ケーキを食べたファングの感想に返事をしたのは緑色のロングヘア

ーで白衣を着た男性、ヴェロッサ＝アコースだ。

「まったくロッサは……こ、今回はケーキを買ってきてくれましたから強く言いませんが、貴方はもう少し仕事に誠意をもって取り組みなさい」

「はいはい、分かったよシャッハ」

そんなヴェロッサにケーキを食べながら注意をするのは紫色の髪をショートカットにした女性、聖王教会修道騎士シャッハ＝ヌエラ。どうも本人が食べたいといっていたケーキを買ってきてもらったから、あんまり強く叱れないようだ。

「♪～～おいひぃ～♪」

「確かにこれはおいしいわね……ロッサ、買ってきてくれてありがとう」

「どういたしまして」

シャランとカリムもロッサが買ってきたケーキにご満悦のようだ。

「そういやカリム、機動六課って今日設立だっけか？」

「えぇ」

「はやて、頑張ってるかな」

「あのタヌキだ。頑張ってはいるだろ」

「？　機動六課ってなんですか？」

「あぁ、シャランは知らなかったな」

ファングが空間モニターを展開して操作をすると、テーブルの真ん中に海沿いに作られた隊舎と、本局の制服を着た茶髪の髪をショートカットにした若い女性の画像が現れた。

「機動六課っつうのはミッド地上に新しく創設された本局所属の少数精鋭の実験部隊だ。近年発見されているロストロギア・レリックの確保を目的としているんだ」

「レリック……ですか？」

「あぁ」

ファングがさらに空間モニターを操作すると、新たに赤い結晶の画像が現れた。

「これがレリックだ。レリックは高エネルギー結晶体に分類され、下手すると周囲を巻き込んで爆発する危険なロストロギアだ」

「実際に四年前にレリックが爆発して空港が大火事になったりしたの」

「幸いにも地上部隊と駆けつけたエースたちの迅速な救助活動のおかげで死者はでなかったんだけどもね」

「まぁニュースとかでは本局航空部隊が活躍したとかっていうデマが流されているんですけどね」

そこでファングがモニターに映っている女性に視線を向けた。

「んで、そんときに現場にいたエースの一人であるこのタヌキ……
……もとい八神はやて二等陸佐がこういった事故・事件における本局
の部隊の行動の遅さを解決するために四年かけて作ったのが機動六
課だ」

「この部隊の後見人は私にクロノ＝ハラオウン提督、リンディ＝ハ
ラオウン総務統括官がしているの」

「んで、そんな機動六課が今日設立で、はやては部隊をもつのがは
じめてだからちょい不安でな」

「そうなんですか」

ファング、カリム、ヴェロッサ、シャッハたちの説明にシャランは
納得した様子で頷いた。

「しっかし、ほんと時間の流れって早いよなぁ。このあいだまでチ
ビだったあいつが、もう成人して自分の部隊を持つようになってる
からなぁ」

「ファング兄さんからすれば、ほんとに早いだろうね」

「まぁな。はやてとはじめた会ったときのことは鮮明に思い出せる
からな」

「たしかハリセンで殴られたんですよね？」

「初対面で殴られるって……な、なにしたんですか？」

「いや、お前が噂の豆タヌキかって言ったら」

「それはファングが悪いですよ」

「僕もそう思うよ」

その後、五人は談笑しながらケーキを食べていった。

この時はまだ誰も知らなかった。

いや、知っていてもわかっていなかった。

世界が永久に平和なことなど無いということを。

奴らが力を蓄えていたことを。

戦いの時は、刻一刻と迫ってきていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7147x/

魔法少女リリカルなのはStrikers ～鋼の竜騎士と魔導師たちの戦い～

2011年11月7日08時10分発行